

マールラン船ここに復元!!

マールラン船とは？

古くから沖縄では貨物の運送で舟と船を使ってきました。うるま市の平安座島を中心に、北は奄美大島諸島からヤンバル地域にかけて、南は与那原や那覇、先島諸島にかけて、交易の船が行き来していました。沖縄ではその交易の船を「山原船やんばらせん」と呼びますが、平安座島ではその船のことを「マールラン船」と言います。

マールラン船は、舳が三角形に張り出し、舳の両脇には眼があり、真横から見ると船体が曲線をなし、2枚の帆がたてられているのが特徴です。



乗船体験

帆で風を受けて走る木造船「マールラン船」が半世紀ぶりに復元されました。復元作業は、与那城平安座に在住する越来治喜さん(60)と長男の勇喜さん(32)、3人の弟子で約1年かけて行われ、8月16日、17日の両日、文化課主催の下、完成したマールラン船の乗船体験が海の駅あやはし館横で行われました。あいにくの雨模様のため、午前中の乗船体験は中止となったものの、午後からは再開し、子どもから大人まで大勢の方で賑わいました。乗船した方からは「歴史上の船に乗るといって貴重な体験ができ、戦前の人の感覚を味わうことができた」と見たこともない形の船に胸を躍らせる様子が伺えました。



【海の駅あやはし館横で行われた乗船体験の様子】

マールラン船の復元に込められた想い



市指定無形民俗文化財技術保持者 越来治喜さん【越来造船】

復元するにあたり一番難航したのは、材木探しであった。マールラン船は肋骨部分が曲線となるため、材木が市場に出回っておらず、宮崎県まで行き、2か月かけて探してきた。

約1年かけて復元に成功したが、船は海に浮かべて初めて完成と言える。7月31日のマールラン船進水式、そして今回の体験乗船を経て、ようやく完成した実感が沸いた。文化課や勝連海洋クラブ、平安座自治会等、応援してくれた多くの方々へ感謝の気持ちでいっぱいである。

今後はうるま市の象徴として文化や教育面で、このマールラン船が活躍することを祈るとともに、この技術を伝承し、後世に残していかなければならない。